

グランドゼロ症候群

テロの後遺症に苦しむ消防士たち

中田 光



中田 光 / なかた・こう

1954年、東京生まれ。東京大学農学部、京都大学医学部卒業。米国ベルビュー病院留学。東京大学医科学研究所微生物株保存施設助手などを経て、2000年より国立国際医療センター呼吸器疾患研究部細菌性呼吸器疾患研究室長。

9月11日の夜、いつものように就寝前にニュースを見ようとテレビのスイッチを入れた私は、全身が凍りつくような戦慄に襲われた。いきなり目に飛び込んできたのが、留学時代よく出かけたダウンタウンから眺めたワールドトレードセンター(WTC)のサウスタワーに2機目の航空機が突入する映像だったのだ。米国の繁栄の象徴とも言うべきWTCがいつも簡単に、一瞬のうちにして完膚なきまでに粉々になってしまうとは、いったい誰が想像したのだろうか？ 私はテレビを見ながら、旧約聖書に出てくるバベルの塔の不思議な物語を思い出していた。天空までとどく塔を造るという人々の傲慢な試みに怒った神がとった行動は、それまで同じ言語で話していた人々を、一瞬にして違う言葉を話すようにしてしまったことだった。神は言葉のもつ威力をよく知っていたのだろう。人々は共同作業ができなくなり、散り散りに去って、やがて塔は崩壊する。

20世紀後半の軍拡競争を連連の崩壊という形で勝ち抜いた米国は、さらに世界中に基地を造り、国運を軽視し、京都議定書は批准せず、グローバルスタンダードの名の下に自分たちのやり方を世界中に普及させようとしてきた。ITが進歩していけば、やがて世界はひとつになる。そんな幻想をホワイトハウスの人たちは抱いてきたのではないかとWTCのテロは、そんなグローバルスタンダードの幻想と傲慢を打ち砕く21世紀の「バベルの塔」のように思えた。

それから米国がとった行動にはまたかとうんざりする思いがした。テロは犯罪だが、国と国が存亡を賭ける戦争ではないはずだ。ホワイトハウスは、これは戦争だと宣言して愛国心を鼓舞し、お決まりの空爆とハイテク戦争を始めた。タリバン政権は崩壊したが、米国が勝利したとは誰も思っていない。ただ、難民と孤児と虚しさで新たな憎悪を生んだだけだった。その後1年も経たないうちに、ITバブルが崩壊し、米国経済の成長も驚愕を見せ始めた。経済にも国際政治にも無知な私だが、数十年後の歴史の教科書には、WTCの崩壊がアメリカ凋落の最初の象徴的な事件として書かれるような気がしてならない。

しかし、その後New York Fire Department(FDNY)の消防士たちが崩壊寸前のWTCの最上階に命をかえりみずに駆け上がったこと、まだ煙塵の立ち昇る崩壊現場で懸命の救助にあたっている姿が報道されるにつれ、米国とアルカイダ、タリバンのどちらが

正しいかという議論はさておき、彼らに支援と共感の輪が広がっていった。私も留学時代の共同研究者マイケル・ワイデン医師が消防士たちの健康状態の調査を始めたことを知って、矢も楯もたまらず、テロから半年後の2002年2月に旧知の染谷さんと大学院生の寺川君と共にFDNY54分署とワイデン医師を訪問することにした。染谷さんはライオンズクラブ国際協会(*1)大会参加委員で、渋谷消防団の功労者でもある。ライオンズクラブが、FDNYとアフガニスタンの難民にライオンズクラブ国際協会より4万ドルの寄付を贈ると決めたことを伝える表敬訪問だった。

WTCの崩壊現場は、有名なチャイナタウンから西へ歩いて約15分のところにある。午前中にニューヨーク入りした私たちは、一刻も早く現場を見たいという気持ちに駆られて、チャイナタウンで昼食をとった後、早速徒歩で現場に向かった。以前であれば、空を仰いで2本の塔を目指せば自然とどき着いたのに今ではそうはいかない。しかし、最高裁判所を過ぎたあたりから、立っている警官の多さと市民の緊張した雰囲気によって、自然に現場へと足が向かった。あと約200mというあたりから、以前あったモダンな商店街はみなシャッターを閉め、アスファルトは粉塵で白く変色し、道行く人もまばらで、きな臭いにおいが鼻を突いた。あと100mというところで、私たちは、蟻の這い出る隙間もないほどのバリケードと高い塀と警官に行く手を阻まれた。仕方なく、遠巻きに現場を窺うと、ブルドーザーのエンジン音や巨大クレーンの金属音が鳴り響いていて、急ピッチに瓦礫の撤去作業が進んでいることが窺い知れた。近くの塀には掲示板が設けられ、沢山のメッセージが寄せられていた。残念だったのは、「Remember 9/11 & 12/8」と書かれたポスターがあって、60年前の真珠湾攻撃が今回のテロと同じ扱いにされていたことだった。

翌々日、今回のテロ後の救難活動で活躍したFDNY54分署に向向いた(写真1)。54分署は、マンハッタンのほぼ中心部、48丁目、8番街にある。WTCはここから真南に6kmほど下ったところであり、当日は、1機目が突入してすぐに日勤の消防士が14人出動して、全員死亡している。大災害の時には、通常3分署が1チームを作り救難にあたることになっているが、今回は54分署を含むチーム35名が出動し、全員が死亡した(FDNY全体で343人死亡)。テロの日、非番で難を逃れたJohn Fila消防士が我々を迎えてくれた。染谷さ



写真1



写真2:染谷さんはワイクリテ29号「感染と人間(12)」にご登場されています。



写真3

んはかしこまって、消防庁総監、ライオンズガバナー、渋谷区長などからの親書を手渡し、救援活動にあたった消防士の勇気と献身に敬意を表し、犠牲になった多くの人たちのご冥福をお祈りしますとお伝えした(写真2)。また、マグナム社より出版された今回のテロの写真集の収益がFDNYに寄付されることもあわせてお伝えした。Fila氏によれば、今回の救難活動で犠牲になった日勤の消防士たちはほとんどが10年以上のベテランで、人的損失を回復するのに何年かかるかわからないと言う。また、第二陣以降出動した消防士たちの中には、呼吸器の障害のために退職を余儀なくされた者や、仲間を一時に失ったショックから神経症になった消防士が多いと言う。ニューヨーク市では、800人の精神科医やカウンセラーたちが、ボランティアで消防署や家庭を訪問し、心のケアにあたっている。Fila氏は淡々と話してくれたが、それだけにテロの後遺症の深刻さが伝わってきた。

後日、ニューヨーク大学ペルビュー病院にかつての共同研究者であるマイケル・ワイデン医師を訪ね、Fila氏の話をもう少し医学的に理解することができた。ワイデン医師は、ニューヨーク大学医学部の助手を務める傍ら、FDNYの健康管理医として、テロ後の消防士たちの健康状態を調査している。彼の調査によると、テロ後の1週間間に、FDNY 12,000人の消防士のうち、11,000人が救難活動に出動し、その後6ヵ月間の調査で、301人が慢性的咳に苦しんでいることがわかった。咳以外の主な症状は表に示す通りで、呼吸困難を訴える者が94%に達している。

表:テロ後に慢性的咳を訴える301人の消防士の主な症状・徴候

呼吸困難	94%
胸部苦悶感	85%
胃食道逆流症(GERD:胸やけや胃酸を症状とする)	87%
慢性鼻炎	54%
夜間不眠(主として咳による)	63%

肺の機能で重要なのは言うまでもなく、空気を取り入れて酸素を肺の毛細血管に送り込み、二酸化炭素を呼気に排出することであるが、努力肺活量(できるだけ息を吸い込み、できるだけ息をはいたときの呼気量)が、テロ前に比べて500mℓ以上も減ってしまった

人が301人のうち、54%もあった。原因は細い気管支に粉塵が吸い込まれたため、そのことを示す1秒量(1秒間にはける最大の呼気量)の減少が顕著だった。また、87%の人に胸やけや胃酸の症状が現れたのは奇異な感じがするが、次の一消防士の話を知ったときうなずける気がした。

45歳の消防士長。2機目が突入した直後に現場に到着し、サウスタワーの前で救難活動を指揮し、被災者の救出にあたった。サウスタワーの崩壊で落下する粉塵に埋まったが、幸い怪我は軽微で、自力で這い出したが、周囲は「地下牢のように暗く、濃霧よりも濃い」粉塵に覆われていたと言う。やがて激しい咳と嘔吐に襲われ、彼は失神しそうになるが、懸命に口と鼻孔から塵を掻き出した。しかし、彼は大量の粉塵を吸い、また呑み込んでしまったため、以後、慢性的咳と呼吸困難、胸やけに苦しんでいる。

つまり、タワーの下にいた人たちは、あまりに大量の粉塵を吸っただけでなく、呑み込んでいたことになる。前代未聞の惨事で、市民の救出が優先され、消防士の保健にあまり注意が行き届かなかったのだろうか。マスクをして救難にあたった消防士はテロ初日は7%で、2日目でも15%に過ぎなかった。マスクを着用した者は、表にある症状・徴候が軽微であったことは言うまでもない。以上は、比較的短期間(6ヵ月)の調査だが、これらの後遺症が今後10年以上経って、消防士たちの健康にどのような影響を与えるかを考えると非常に心配である。塵肺症になり呼吸不全が進む人、アスベスト肺(*2)に至る人、肺癌を合併する人など、様々な長期的な影響が予想される。

テロから半年経って、グランドセントラル駅は何事もなかったように通勤客でごった返していたが、地下道にはテロの行方不明者の写真を貼った掲示板が立てられ、「もしかして」という家族の想いが切なかった(写真3)。それにしても、テロの被害にあって後遺症に苦しむ消防士や市民たちは今後どのような生活を送っていくのだろうか?おそらく、事件の重大さの影に隠れて次第に人々から忘れられていくに違いない。そうなる前にせてこの一文をしたためておきたいと思ひ、筆をとった次第である。

(*1)1977年にアメリカで結成された世界最大の社会奉仕団体

(*2)建築資材の中などに含まれているアスベスト(石綿)は、吸入した場合悪性胸膜中皮腫を発症する可能性が高い。